【第三種郵便物認可】

私の苦笑い

ピアニスト
伊藤　恵氏

いとう・けい　1959年名古屋生まれ。77年にモーツァルテウム音大へ留学。83年、サバリッシュ指揮バイエルン州立管弦楽団と共演しドイツデビュー。03年、東京芸術大助教授。

国際コンクール、まさかの予選落ち
音楽への真心 忘れていた

一九八三年五月、ベルギーの首都ブリュッセルで開かれたエリザベート王妃国際音楽コンクールを受けたところ、一次予選で敗退した。ザルツブルクのモーツァルテウム音大へ留学中の七九年、自分にとって最初の国際コンクールだった仏エピナルでいきなり一位をとり、周囲を驚かせた。

師ハンス・ライグラフ教授も「レパートリーを広げる好機」と勧め、以後、八〇年のバッハ国際コンクール（ライプチヒ）二位、八一年のロン＝ティボー国際コンクール（パリ）三位と好成績を収めた。日本でも第一次コンクール・ブームと言われた時代。期待はエリザベートに向けて高まり、ミュンヘンのホームステイ先一家も「今度は一位だよ」と励ましてくれた。

しかし内心ではもう、コンクールが嫌になっていた。競走馬のようにレースへ参加、点数の比較で世に出る仕組みが納得できず、心理的に追いつめられていった。ブリュッセルの予選で弾いたショパンの「スケルツォ第四番」は当然余裕のない演奏で、音楽というより拷問に近かった。後で聞いた話では、以前のコンクールで私の演奏に触れていた審査員の中から「イトウはどうかしたのか？」という声も上がったという。

一次予選の発表日に合わせ、日本から来てくださった恩師の有賀和子先生は優しかった。「コンクールなんて、そういうものよ」とだけ言い、旬の白アスパラガスを仕入れてゆで、食べさせてくれた。今でも五月が来るたび、先生と二人で頂いたアスパラガスの〝甘ほろ苦い〟味を思い出す。

渡欧六年。いくらコンクール否定にかかったとはいえ、一次落ちは生まれて初めての屈辱。一時は「神様がピアノをやめろ、と言っている」、次いでは「日本へ帰り、細々と音楽の仕事を続けよう」と考えた。

だが過剰な期待が瞬く間に鎮まったおかげで、初心を取り戻すことができた。「純粋に音楽と向き合った六年間の成果をきちんと出し帰国しよう」と思い直し、四カ月後のミュンヘンでARD（全ドイツ放送網）国際コンクールに参加することを決めた。ライグラフ先生に「一人でやる」と宣言すると、巧みに突き放してくださった。

音楽が、ピアノが好きでけいこに夢中だった子ども時代のような日々へ帰り作曲家と自分がどう向き合い、何を表現したいのかを真剣に探った。例えばシューベルトのように生きるか死ぬか、普通なら「これから」という年齢の三十歳で未来を断ち切られた青年の苦悩そのものの楽曲と、コンクールは何の関係もない。世に出るか否かではなく、もっと純粋で神聖な気持ちで作曲家と語り合う時間が徐々に戻ってきた。

ミュンヘンの選考では音楽のことだけに集中でき、ピアノ部門で日本人初の第一位に輝いた。東洋人が欧州へ渡り、西洋音楽を弾くことに長く抱いてきた違和感も「イトウのシューベルトを聴き、茶道を思い出した」というイタリア人審査員のコメントで氷解した。

すべては四カ月前の予選落ちで目覚め、音楽が「好き」との思いを回復して得たご褒美で今に続く演奏活動の出発点となっている。（談）

卑小な自分に気付いて成長

失敗訓　日本はクラシック音楽の本場、欧州からみて、地理と文化の両面で極東に位置する。若い演奏家が国際楽壇で頭角を現す上で、コンクール受験は必要悪と言われる。だが、多種多様な個性を一つの価値観で選別する行為自体、表現の自由とは矛盾する。

コンクールが長い演奏活動の入り口に過ぎず、演奏家自体が「音楽という巨大宇宙の中ではチリ程度の存在」と早くに悟ったことが、日本を代表するピアニストの「今」を支えている。

（編集委員　池田卓夫）